(1)人びととの連帯意識

1945（昭和 20）年 3 月 9 日深夜から 10 日未明にかけての東京大空襲のとき、加藤は東京帝国大学医学部の附属病院に勤務していた。その頃には自宅に帰ることは稀で、病院内に寝泊まりしていたことはすでに述べた。空襲で火傷を負った人びとが次々に病院に運びこまれてきた。

> いくらか空いていた病室は忽ちいっぱいになった。寝台の数は限られていたから、床にふとんを敷き、病室の床ばかりでなく、廊下にも病人を寝かせた。看護婦のすべて、医局員のすべてをあげて、私たちは、応急の処置に全力をつくした。火傷の患者は、重症の場合には、循環障害をおこす。応急処置といっても、局所の手当ということだけではすまない。数日の間誰もがほとんど文字通り寝食を忘れて働きつづけた。私はその後もながく病院で働いていたが、そのときほど我を忘れて働いたことはなかったし、またそのときほど我を忘れて働く人々の仲間であったことはない。担ぎこまれた患者たちは、老人も、子供も、男も、女も、同じ爆撃を忍び、同じ生死の境に追いこまれた一種の仲間にちがいなかった。彼らは相互にたすけ合って私たちの手の足らぬところを補ってくれたし、私たちの仕事そのものが、私たちを含めての仲間のなかでの、たすけ合いに他ならなかった。爆撃機が頭上にあったときに、私は孤独であった。爆撃機が去って後の数日ほど、私が孤独でなかったことはない。(『羊の歌』「内科教室」)

ともに被災した人びとへの献身的治療を施すなかで、人びととの連帯意識が加藤のなかに芽生えた。太平洋戦争が始まったときとはまさに正反対の感覚を味わったのである。

開戦直後の心境については、次のように綴っている。「東京市民は、〔日本がアメリカ・イギリスと戦争状態になったことを〕世界中がよろこんでいることを知らなかったから、みずからよろこんでいたのである。私は、そのよろこびを暗澹（あんたん）たる気もちで眺めていた。そのときほど私が東京の人々を遠くに感じたことはない」（『羊の歌』「ある晴れた日に」）。